

学内活動報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂大学保健看護研究 7
 P.80-86 (2019)

実習指導者が実習指導に抱く思いと大学との協調の必要性 ～実習指導者研修会企画のアンケート調査結果より～

Clinical instructor's thoughts toward their instructional methods and the importance of collaboration with Juntendo University - based on the survey results for clinical instructors -

桑村 淳子*
 KUWAMURA Junko
 小川 典子*
 OGAWA Noriko

古川 亮子*
 FURUKAWA Ryoko
 西 典子*
 NISHI Noriko

江口 晶子*
 EGUCHI Akiko
 横山 悦子*
 YOKOYAMA Etsuko

石井 愛夏*
 ISHII Aika
 川口 千鶴*
 KAWAGUCHI Chizuru

要 旨

順天堂大学保健看護学部の実習委員会では、実習指導者研修会の内容を検討するために2017年度に本学部で実習指導を担当した実習指導者145名を対象に質問紙調査を実施した。結果として、実習指導者は学生が学びを深め、領域・職種・病院に興味を持ってもらえることを目指していた。そのためには、実習指導者自身が能力を高め、かつ教員との連携、施設スタッフとの連携が重要であり、実習指導者研修会では実習指導者自身の能力を高める内容や意見交換の場を設ける必要がある。今後、実習指導者研修会を有意義なものにするためには、実習指導者の率直な意見を反映した実習指導者研修会の構成内容にしていくことが求められている。

索引用語：実習指導者研修会、実習指導、連携

Key words：Workshop for clinical instructors, Clinical instruction, Collaboration

1. はじめに

順天堂大学保健看護学部のカリキュラムは、保健師と看護師の統合教育課程である。また本学部の近隣にある順天堂大学附属の病院は1施設であり、教育課程をすべて満たせるだけの診療科や病床数ではないことにより、大学周辺の多くの病院や施設で実習を実施せざるを得ない状況にある。そのため実習指導の質を担保する目的もあり、本学部では開学以来、実習指導者

研修会を毎年実施しているが、その内容は実習指導者のニーズを反映しているのかという疑問が生じていた。そこで実習指導者研修会を運営する実習委員会では、本学部の実習指導を担当した経験をもつ実習指導者を対象に調査を行い、今後の実習指導者研修会のあり方を検討することとした。

調査にあたり実習指導者研修会の希望のみを聞いても回答しにくいことから、実習指導を行っている際の困難^{1,2)}に関する報告があることを踏まえ、実習指導上の困難な点やよかった点を想起する質問項目も含めて調査をすることとした。

* 順天堂大学保健看護学部

* Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing

(Nov. 9, 2018 原稿受付) (Jan. 18, 2019 原稿受領)

II. 実施方法

1. 実施期間

2018年2月

2. 実施対象者

2017年度に順天堂大学保健看護学部の実習指導を担当した看護師、保健師、助産師

3. 調査方法

2017年度に順天堂大学保健看護学部の学生が実習を行った68施設に調査用紙を送付し、施設担当者が対象者に調査用紙を配布した。対象者は無記名で回答し、施設ごとの回収ボックスに封をして投函した。施設担当者には、投函された封筒を開封せずに本学部へ返送してもらった。

調査内容は、担当した実習対象者の属性、実習指導に対する気持ち、実習指導をしてよかった点や困難と思った点、実習指導への取り組み方、実習指導者研修会に対する意見とした。

4. 分析方法

統計処理できるものはExcelを用いて単純集計を行い、記述部分はNVivo11を利用して質的記述的分析を行った。

III. 倫理的配慮

調査用紙や返送封筒は無記名とし、また調査用紙を封入した封筒とは別に返送用封筒を準備することで、消印等による施設や回答者の特定もできないように配慮した。また、調査用紙には協力が得られない場合は白紙で返送しても良いことを明記した。返送された調査用紙は、返送封筒を開封後に混ぜることで施設や回答者の推測ができないようにした。

IV. 結果

調査用紙は234部(68施設)郵送し、157部(回収率67.1%)の返送があった。白紙3部が含まれていたため、有効回答数は154部(配布数に対する有

効回答率65.8%)であった。

1. 対象者の属性

対象者の平均年齢は40.9 ± 8.9歳であった(表1)。看護職の出身養成機関は専門学校が最も多く(図1)、また看護師資格をほとんどの対象者が持っていた(図2)。今までに本学部主催の研修会を受講した経験のある対象者は37人であった(図3)。

実習指導領域は基礎看護実習領域が最も多かった(図4)。また、基礎看護実習を指導した指導者は看護総合実習や成人看護実習の指導も行っていることが多かった。

表1 属性

	平均±SD
年齢(歳)	40.9 ± 8.9
職歴	
看護師経験年数(年)	16.2 ± 8.7
保健師経験年数(年)	14.8 ± 7.4
助産師経験年数(年)	12.6 ± 8.8
指導者歴	
臨床実習指導者経験年数(年)	5.4 ± 4.6
本学部指導者経験年数(年)	2.9 ± 1.8

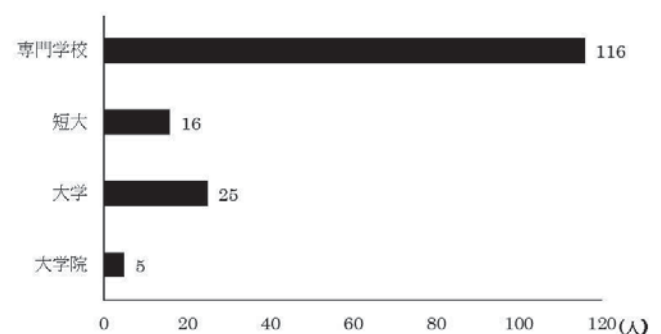


図1 看護職の出身養成機関 (n=153、複数回答)

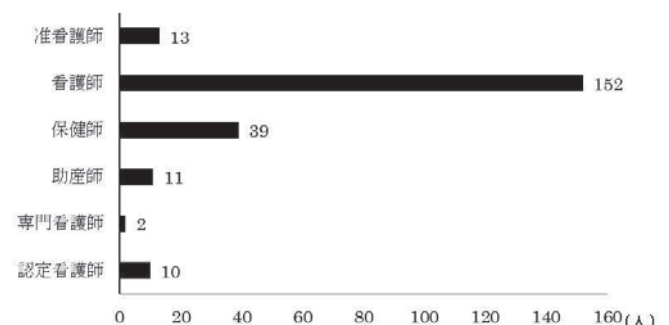


図2 看護職の資格 (n=153、複数回答)

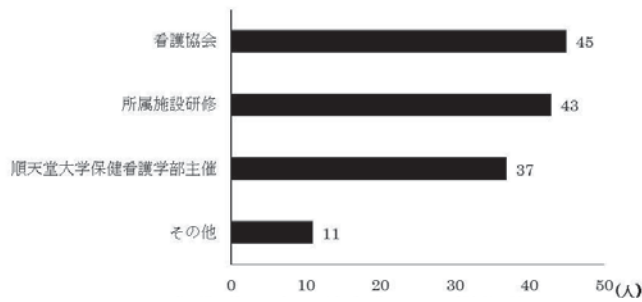


図3 実習指導に関する研修先 (n=112、複数回答)

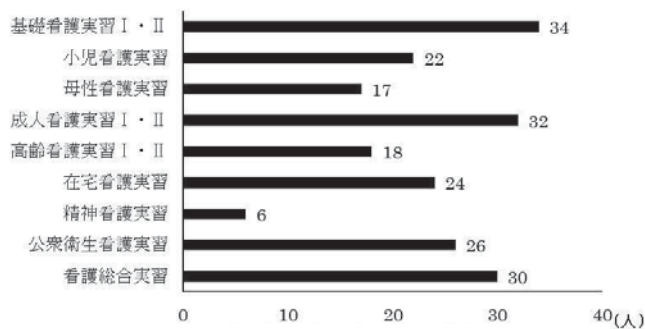


図4 実習担当科目 (n=146、複数回答)

2. 実習指導に対する思い

実習指導に対して「楽しんでいきますか」「大変ですか」「やりがいを感じていますか」「達成感を感じていますか」の4項目を「1：そう思わない」～「10：とてもそう思う」の10段階評価で調査した。どの項目も5～10の評価をつけている実習指導者が多かったが、「大変である」と思っている項目の割合は92.2%と最も高かった(図5)。

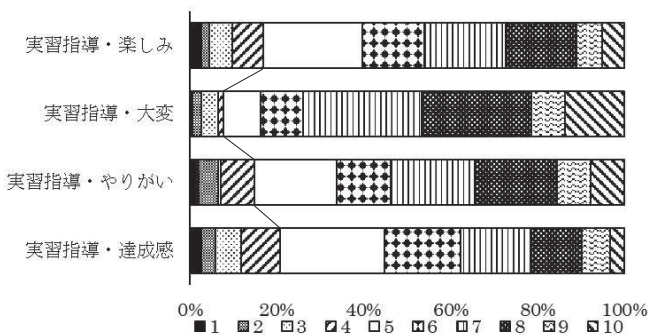


図5 実習に対する思い (n=154)
 (1：全くそう思わない～10：とてもそう思う)

3. 実習指導をしてよかったこと

実習指導をして「よかったと思うことがある」と

回答した指導者は130人(87.8%)であった。また、実習指導をしていて「よかったと思うことがある」と回答した指導者にその内容を記入してもらった結果を表2に示した。実習指導者自身が「学生指導により自分の勉強になる」ことや「学生が実習で良く学べていると(成長が)分かる」ことがよかったと記述している実習指導者が多かった。

表2 実習指導をしていて良かったと思うこと
 (n=130、複数回答)

記載内容	実数
指導者自身について	77
● 学生指導により自分の勉強になる	41
● 自分や自分の看護を見つめなおす機会となる	30
● スタッフ・後輩の指導に役立つ	5
● 患者と向き合える機会となる	4
● 教員の指導を見ることができる	3
● 客観的・最新の情報が得られる	2
● やりがいがある	2
● 学生から刺激がもらえる	1
学生の姿勢	72
● 学生が実習でよく学べていると(成長が)分かる	46
● 学生の新しい気付き・習得がみられる	19
● 学生の積極的な・興味を持った学ぶ姿勢	17
● 学生の笑顔・感性がみられた	9
学生と指導者の関係	11
● 就職後に学生が自分を覚えてくれた・就職希望の理由になった	5
● 学生の指導者評価が良かった	3
● 学生さんたちからたくさん質問を受けたとき	1
● 学生の意見が開ける	1
● 学生の気持ちや要望を反映した看護を一緒に考えることができる	1
学生と患者の良好な関係	8
● 学生の関わりで患者に普段みられない・良い反応があった	5
● 患者から学生の関わりに対する感謝があった	2
● 実習生と子どもが表情良く関係を作れた	1

4. 実習指導上困難に思っていること

実習指導をしていて「困難に思っていることがある」と回答した指導者は136人(88.3%)であった。実習指導上困難に思っていることで最も多かったのは「指導時間の捻出」であった。次いで「学生とのかかわり」「看護過程実習記録の指導」が挙げられており、学生との教育的な関わりに困難を感じていた。また約1/3の指導者が「病棟内/職場内の連携」あるいは「教員との連携」といったマネジメントに関する困難にも直面していた(図6)。

そのほかに、困難に思っていることを自由記述してもらった結果では34人が回答し、学生の「指導方法

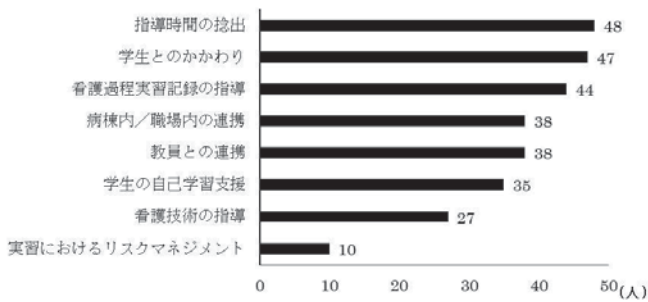


図6 実習指導上困難に思うこと (n=136、複数回答)

に対する不安・心配」や「患者選定・対象者の集客が大変」といったことを記述している実習指導者が多かった(表3)。

表3 実習指導上困難に思っていること (n=34、自由回答)

記載内容	実数
学生の指導方法	19
● 実習指導に対する不安・心配	12
● 実習指導内容(一般常識についての指導もしなければならない)	3
● 実習指導の大変さ	2
● 患者・受診者・利用者へ迷惑にならないように配慮する	1
● 教員との考え方の相違	1
物理的・環境的な要因	18
● 患者選定・対象者の集客が大変	7
● 時間的余裕のなさ	5
● 人員不足(学生の数が多)	3
● スタッフとの連携(学生指導への理解)	1
● ス・・・・・	1
● ・・・が・し・実習指導が・・・に・い	1
・・方法	1

5. 今後の実習指導の取り組み方

「今後どのように実習指導に取り組みたいと思っているのか」を自由記述してもらった結果、124人が回答した。内容は、学生が「在学中の実習での学びを伸ばす」ように関わりたいという思いが最も多く、次いで「領域・職種・病院に興味をもってもらうようにする」関りや「担当者・教員との情報提供や連携(病棟スタッフ/教員・大学)」、実習指導者自身が「(指導できるよう)自分がしっかり勉強する」といった記述が多かった(表4)。

6. 本学部の実習指導者研修会への希望

本学部の実習指導者研修会に期待する内容は81人が回答し、「実習先への希望」や「実習指導方法」を

表4 今後どのように実習指導に取り組みたいと思うか (n=124、自由回答)

記載内容	実数
学生への対応	91
● 在学中の実習での学びを伸ばす	60
● 領域・職種・病院に興味をもってもらえるようにする	23
● 学生が学びたい(主体性を持つ)・よかったと思えるような実習にしたい	18
● 学生がより考えられるようにする	6
● 学生が目標としている実習経験が出来る	6
● 個別性に応じた指導	6
● 学生とともに考えていく姿勢	5
● モラル(身だしなみ、挨拶)を保つ	3
● 患者との関わりが楽しいと思えるようにする	3
● 働いた後に役立つような指導	3
● より実践的な実習が出来るようにする	2
● 学生だからこそ経験出来る・感じることを援助する	2
● 学生目線で考えながら指導する	2
● 経験値を増やせるような支援	2
実習環境	31
● 担当者・教員との情報提供や連携(病棟スタッフ/教員・大学)	22 (15/9)
● 安全第一	3
● 業務と実習時間の調整	3
● 時期をずらした実習	1
● 実習学生の数を減らす	1
● 病棟にメリットがある関わり	1
自分自身に対して	30
● (指導できるよう)自分がしっかり勉強する	22
● 看護師としての取組み	2
指導者としての取組み	3
● 学生に寄り添う指導者を目指す	1
● 学生のモデルとなるような看護師	1
● 学生の特徴を理解し指導に生かす	1
● 責任をもって取り組む	1
患者に対して	2
● 患者にメリットがあるような関わり	1
● 患者に負担がかからないよう配慮する	1

大学と情報交換すること、「他実習施設との意見交換」をすることを挙げる実習指導者が多かった(表5)。

表5 本学部の実習指導者研修会に期待すること (n=81、自由回答)

記載内容	実数
実習を行う上での大学との情報交換	63
● 実習先への希望	18
● 実習指導方法	12
● 学生の特徴	8
● 教員との連携構築	8
● 実習内容への意見	5
● 大学の特色や方針	5
● 既習内容	4
● 実習のフィードバック	3
研修会に関する意見	23
● 他実習施設との意見交換	16
● 研修進行方法に関する意見	6
● 研修会の開催時期の変更	1
指導者間の実習上の問題解決	2

また、実習指導者研修会の講義や講演内容として、「実習指導方法」や「学生理解」に関することなど、実習指導に活かせるものを挙げている実習指導者が多い中で、「大学の実習方針の理解」といった大学教育に関する希望もあった（表6）。

表6 講義・講演を取り入れた研修の場合に希望するテーマ (n=58、自由回答)

記載内容	実数
実習指導に関する自分自身の学び	62
● 実習指導方法	22
● 学生理解	16
● 実習指導者の能力向上（実習関連）	10
● 実習指導者の能力向上（実習以外）	6
● 実習内容の理解	5
● 実習事例の検討	3
大学の方針	5
● 大学の実習方針の理解	3
● カリキュラムの変更内容の伝達	2

V. 考 察

本調査では、実習指導者は学生への実習指導を大変と感じながらも楽しんでおり、またやりがいや達成感も感じていることが把握できた。

1. 実習指導をしてよかったこと

実習指導者が実習指導をしていてよかったと思うのは自身の学習や成長の機会となったばかりではなく、学生や患者と新たな関係を築ききっかけとなったことも挙げられていた。また、実習指導者は学生が実習目標を達成したり学生自身が成長したりすることを援助するために、自分自身も指導方法を学習したり患者の疾患や看護を振り返ったりしていると考えられる。布佐は初心者である学生が、自ら看護上の判断を行い対処していくには、指導者の提供するケアリングの環境が有効である³⁾と報告しており、実習指導者は学生が立案するケアの個別性にも応じた実習指導を模索する必要がある。そのための学習を実習指導者は負担とは思わず、良い機会と捉えているのではないかと考えら

れる。

2. 実習指導上困難に思っていること

実習指導者は、ケアや記録といった指導を学生に行う時間の捻出や学生との関り方に困難を感じており、実習指導方法に対しても不安や心配を感じていた。酒井らによると看護教育カリキュラムが変化する中で、実習指導者は実習での指導がどこまで求められているのかわからず指導上の困難を感じていた⁴⁾と報告している。本調査に回答した実習指導者は平均年齢が40歳代であることや専門学校を卒業した人が多かったことを考えると、実習指導者と本学部生の間で求められる看護知識は変化し、大学教育という自身が体験していない教育環境にも対応する必要があるため、実習指導方法に不安や心配を抱いているのではないかと推察できる。また、実習目標を到達させるための患者選定や対象者の集客に困難を感じていることも実習指導方法への不安や心配につながっている可能性がある。

そのほかに、「病棟内／職場内の連携」あるいは「教員との連携」といったマネジメントに関する困難を感じていることが明らかになった。病棟内／職場内のマネジメントに困難を感じているという報告はこれまでも行われており¹⁾²⁾⁵⁻⁷⁾、志田らは乗り越えられないスタッフとの壁⁵⁾と表現しており、実習指導者とスタッフの間では実習に対する理解に差があり、協力が得にくい状況が往々にして生じる。そのため、志田らは病棟スタッフが一丸となって実習指導ができるような対策が必要である⁵⁾とも述べている。本学部の卒業生が多くいる病棟では、実習に対して病棟スタッフの協力を得られやすくなりつつあるが、実習先すべてに卒業生がいるわけではない。そのため、病院スタッフへの働きかけ方を今後も検討する必要がある。また教員との連携に困難さを感じている結果、実習指導方法に対しても不安や心配を感じている可能性もある。滝嶋は臨地実習指導者と教員の協働するための要件の一つに、教員・実習指導者それぞれが主に関わる側面の明確化⁸⁾

を挙げており、教員は実習指導者と実習指導の内容を常に共有し、役割分担を明確に提示する必要があると考えられる。

3. 今後の実習指導の取り組み方

実習指導者は、学生の興味関心を広げ、学びを深める実習にするために、自らも学びを深める必要があると考えていた。学生は実習指導者や病棟スタッフをモデリングとしているため、根拠を提示しながら指導することが効果的である⁹⁾ともいわれており、根拠をもって行った看護ケアをモデリングとしてもらうことで、学生は学びを深めるとともに、その実習分野に関心を持つようになると考えられる。そのため、実習指導者自身も学ぶ必要性を実習に対する姿勢の一つとして挙げていると推察できる。

4. 本学部の実習指導者研修会への希望

実習指導者は、研修会で実習指導に関する情報交換を大学や他施設と行いたいという希望を持っていた。これは開学以来、本学部で実施してきた実習指導者研修会がグループディスカッションを中心に構成されていたことや、実習施設間で差異のない実習にしたい、大学の方針と乖離のない実習にしたいという思いも反映していると考えられる。実習指導者は、学生が実習をすすめる上でも情報提供の充実や、担当教員や患者と良い人間関係を保っている等、学生が実習しやすい環境作りをより心掛けている¹⁰⁾といわれているが、実習施設間での情報共有や教員との情報共有もまた、より良い実習を作り上げる上で必要なことであるといえる。

加えて、希望する実習指導者研修会の講義や講演内容も実習指導に活かせるものを挙げている実習指導者が多かった。研修システムは臨地実習における学習の意味付けやそれらを効果的に支援するための実習指導者の役割認識によって変化する⁶⁾といわれており、実習指導者が何を実習指導者研修会に求めているのかを把握することも重要である。今回は実習指導者に調査

を実施することで、そのニーズを把握することができた。しかし、社会情勢や看護教育は変化し続けているため、定期的なニーズの把握が必要である。また、臨地実習施設側から評価された研修会は実習指導のみでなく、個々の資質向上やキャリア発達も視野に入れたものである¹¹⁾という報告もあり、実習施設と良好な関係を保つためにも実習指導者自身の資質向上やキャリア発達に関わる内容も含めた臨地実習指導者研修会となるように構成する必要がある。

VI. まとめ

実習指導者は、学生の学びを深め視野を広げるために教員と協働して実習を作り上げたいという思いがあり、そのためにも実習指導者研修会で実習指導者自身の資質向上や情報共有の機会を持ちたいと考えている。そのため、実習指導者の考えを尊重しながら、実習指導者研修会を企画・運営する必要がある。その際には社会情勢や看護教育の変化により、実習指導者のニーズも変化することを十分に考慮することが重要である。

謝辞

この調査を実施するにあたり、ご協力いただきました実習施設と実習指導者の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 細田泰子, 山口明子: 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因, 日本看護研究学会雑誌, 27(2), 67-75, 2004.
- 2) 近藤ふさえ, 田中ひとみ, 堀込克代, 他: 病院内における臨地実習指導者のキャリア発達支援プログラム構築のための基礎的研究, 順天堂保健看護研究, 2(1), 1-10, 2013.
- 3) 布佐真理子: 臨床実習において看護学生が看護上の判断困難を感じる場面における指導者の働きかけ, 日本看護科学雑誌, 19(2), 78-86, 1999.

- 4) 酒井禎子, 中澤紀代子, 石田和子, 他：看護学実習指導者が感じている指導上の困難と学習ニーズ, 新潟県立看護大学紀要, 4, 12-16, 2015.
- 5) 志田久美子, 袖山悦子, 望月紀子：実習指導者が指導者として役割を迫行していく過程とその影響要因, 新潟医療福祉学会誌, 10(2), 18-23, 2011.
- 6) 高島尚美, 渡部節子, 青木由美恵：成人学習者としての経験を活かした臨地実習指導者研修プログラムにおける学びの様相, 横浜看護学雑誌, 1(1), 35-43, 2008.
- 7) 大高恵美, 佐藤サツ子, 佐藤美恵子：療養型医療施設における臨地実習指導の現状と課題～初めて実習指導を行った臨地実習指導者と病棟管理者の面接調査より～, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 10, 39-47, 2005.
- 8) 滝島紀子：臨地実習指導における実習指導者と教員の協働のための要件 - 実習指導者の教員に対する要望から -, 川崎市立看護短期大学紀要, 17(1), 29-35, 2012.
- 9) 山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子：看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因, 信州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 25-34, 2001.
- 10) 舟越和代, 斉藤静代, 吉本知恵：臨地実習における実習指導者の指導に関する意識, 香川県立医療短期大学紀要, 5, 59-68, 2003.
- 11) 黒田久美子, 和住淑子：臨地実習指導の充実に向けた看護系大学と臨地実習施設の協同のための研修ニーズ - 看護系大学・臨地実習施設への質問紙調査より -, 千葉大学看護学部紀要, 32, 69-74, 2010.